

第二日 第3－1

読解指導における「対話の読み」の形成

埼玉大学大学院 浅井雅己

文学教材での授業を構想した時に、そこで求められることは、①学習者が叙述を確かに読む力を育成することと、②学習者が叙述を豊かに読む力を育成することである。

②の「叙述を豊かに読む力」を学習者に身につけさせるには、教材・教師・学習者のそれぞれが対等な関係で向き合い、「対話」していくことで達成できるのではないかと仮説を立てた。教師の読みと学習者の読みとを相互に聞き合い、認め合いながら進めて行く読解指導を「対話の読み」と名付けて、その理論と実践とを考察していく。

教材と自己とが対話しながら読み取った事柄と、同様に他者が教材と対話して読み取った事柄とを教室の場で交流させ、共通点・差異点を確認しながら対話をする。差異点についての対話を深めることで、たくさんの教材にたいする解釈を知ることが可能となり、さらに止揚・統合が進むことで、教材そのものの読みを深めることになっていくと思われる。

理論において着目した考え方は「自己内対話」の概念である。自己内での聞き手を養成することが、他者との対話を支え、発展させていくことに繋がるとされている。私は授業における「自己内対話」を、①他者との対話において、自分が読み取らなかった事柄に気づかされた時、②初読の段階と、ひとつの教材を学び終えた後の段階とを比較してみた時に特に焦点を合わせ、それらの場合での活動状況を考えてみる。

また、「対話の読み」における対話を、①教材対自己の読み、における対話、②他者の読み（教師の読みを含む）対自己の読み、における対話、③自己の読み対自己、における対話、の三相に分類し、それらの指導過程への適用を考察した。以上について、実践における具体的な活動形態を学習形態・発問の内容や在り方を含めて示したい。

「対話の読み」は、教室において、日常の読書と変わらぬ自己の読み、他者の読み、それを対象化し、それらと現在進行中の自己との間で対話をし続けながら、新しい読みを形成していく読解指導と考える。対話しながら、他者の読みを取り入れていくことで、学習者が自己の読みの変容、すなわち発展・深化を自覚できるような指導なのである。